博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　巽　由樹子　　印

学位申請者：井伊 裕子

論文名：19 世紀ロシア移動派風景画―農村風景に見るリアリズムの変化

審査結果

本論文は予備審査を経て、2026 年 7 月 30 日（午後 2 時 30 分から午後 5 時 30 分）に本審査を行った。審査委員は以下の通りである。

審査委員長：巽 由樹子（本学大学院総合国際学研究院・准教授）
審査委員：鴻野 わか菜（早稲田大学 教育・総合科学学術院・教授）
沼野 恭子（本学名誉教授）
久米 順子（本学大学院総合国際学研究院・准教授）
前田 和泉（同・教授、主任指導教員）

審査は本学総合文化研究所 422 室にて公開で行われ、学位申請者、審査委員のほか、8 名の参加を得た。学位申請者が博士学位申請論文の学術的成果について約 10 分の報告を行った後、審査委員から一人ずつコメントと質問が寄せられ、申請者がこれに応答した。その後、審査委員と申請者のあいだで、博士論文の成果や発展的な課題についてさらに討論を行った。この結果、審査委員は全員一致で井伊裕子氏の業績は博士の学位を授与するにふさわしいとする結論に至った。

論文の概要

本論文は、1870 年にサンクトペテルブルクで設立された移動展覧会組合の画家たちによる農村風景画を対象とし、その展開を風俗画との関係から再検討することを目的としている。移動派は一般に、19 世紀後半ロシアを代表する写実主義画家集団として知られ、農民や民衆の生活を描いた社会批判的な「風俗画」によって高く評価されてきた。一方、「風景画」はロシアの自然を描いた叙情的ジャンルとして理解されることが多く、風俗画とは区別された研究対象として扱われてきた。しかし、1861 年の農奴解放以降のロシア社会において、風俗画と風景画はいずれも農村という共通の主題に向き合っていた。本論文はこの点に着目し、従来は別個に論じられてきた両ジャンルを農村表象という観点から横断的に検討することで、移動派風景画をロシア絵画史の中に再定位することを試みた。

研究史上、移動派は社会主義リアリズムの先駆として位置づけられたため、風俗画に見られる社会批判的要素が重視された一方で、風景画は社会的関心から距離を置いた例外的ジャンルとして理解される傾向があった。しかし本論文は、近年の研究が移動派の画家、作品を多面的に捉えようとしている動向をふまえて、風景画を単なる自然描写としてではなく、農奴解放後の農村社会に対する関心と結びついた表現として位置づけた。また、従来の研究では、移動派の作品がロシア中西部の風景を描いたことに注目してきたのに対し、本論文ではウクライナやクリミアを含む帝国南西部地域にも着目し、ロシア風景画の形成をより広い地理的視野から考察した。

以上のような本論文の目的と意義を序論で述べたうえで、本論は三章と、結論および展望を内容とする終章から構成される。まず、第 1 章では、移動展覧会組合成立の歴史的背景を、ソ連期の研究で言われたような反アカデミー運動としてではなく、美術制度史および社会史の観点から整理した。19 世紀前半のロシア絵画は、帝国美術アカデミーを中心とする古典主義やロマン主義の影響下にあり、宗教画や歴史画、理想化された外国風景が重視されていた。しかし 1820 年代以降、ヴェネツィアノフやフェドートフらによって農民や小市民の日常生活に着目する新たな芸術観が登場し、「ロシア人がロシアを描く」という方向性が形成された。さらに農奴解放後の都市化、市民層の成長、美術市場の発展、トレチャコフに代表される市民的パトロネージの拡大が、画家たちの活動基盤を支えた。

第 2 章では、1870 年代の農村風景画を中心に、風景画と風俗画の関係が検討された。たとえばサヴラソフの《ミヤマガラスの飛来》は、発表当時、モスクワ近郊の平凡な自然に詩情を見出した作品として高く評価され、それまでの理想化された風景画とは異なる「ロシアの自然」のイメージを提示した。ヴァシリエフの《雪解け》やクインジの《忘れられた村》では、農民生活や社会的現実への関心が風景表現の中に取り込まれた。こうした事例から、筆者は風景画が風俗画的性格を有していたと論じた。また、1870 年代の移動派風景画では、ウクライナやクリミアがロシア中西部と同様に、写実主義的視点によって表現されていたことも、本章では重視された。ウクライナやクリミアはもはや異国ではなく、ロシア・リアリズムの視覚言語の中に組み込まれた空間として描かれていたのであり、このことは、ロシア風景画の成立が西欧絵画からの影響だけでなく、帝国内部の地域的多様性との相互作用の中で進行した、と指摘された。

第 3 章では、1880 年代における風景画と風俗画の接近が検討された。欧州への留学経験をもつ画家たちによって外光表現や印象派的要素が導入され、自然の光や色彩が重視されるようになったこの時期、ポレーノフらは、農村を単なる社会問題の現場としてではなく、より普遍的で詩的な空間として描いた。こうした変化は風景画だけでなく風俗画にも及び、農民や農村生活を自然環境と一体のものとして表現する作品が増加した。筆者はこの変化によって、農奴解放直後には社会問題の象徴として描かれていた農村が、自然と人間生活

が調和する場として再解釈されるようになったと論じる。その結果、農民は社会的カテゴリーとしてのみならず風景の一部としても表現されるようになり、風景画と風俗画の境界が徐々に曖昧になっていったと指摘した。

終章では、その後の時代の動向が述べられた上で、結論が導かれる。1890 年代、イヴァノーフ《道の途上。移住者の死》やステパーノフ《鶴が飛んでいく》に見られるように、農民の生活や感情は風景描写と不可分なものとして描かれる傾向がより顕著になり、自然そのものが物語性や感情表現を担うようになった。この時期にはヴルーベリやネステロフに代表される象徴主義的傾向も台頭してロシア絵画が多様な方向へ展開したとはいえ、たとえば後者がサヴラソフやポレーノフの影響を受けていたことが示すように、新たな芸術潮流もまた、移動派が形成した抒情的な自然観の延長上に成立していた。以上の考察から、筆者は、移動派の風景画が単なる自然描写のジャンルではなく、農奴解放後のロシア社会における農村表象の形成に深く関与していたこと、移動派風景画は社会批判的リアリズムと造形的探求を媒介する場であり、その両義的性格こそが移動派芸術の多様性を最もよく示していることを、本論文の結論として示した。

論文の評価と残された課題

本論文は、「風景画」と「風俗画」を横断する視点を導入することによって、移動派研究およびロシア風景画研究に新たな視座を提示することに成功している。従来の研究では、風景画は叙情的自然描写、風俗画は社会批判的表現と区分するのが前提とされてきた。これに対して、両ジャンルはいずれも農奴解放後の農村社会という共通の時代背景のもとで描かれたはずだと想定し、農村表象という共通の題材を抽出してその描かれ方の変遷を検討した筆者の視角と分析にはオリジナリティがあり、高く評価することができる。

以上の成果を踏まえた上で、審査員から提起された、本論文の残された課題および発展的課題は次の通りである。

第一に、「風景画」пейзаж と「風俗画」жанровая живопись を分類する、本論文においての定義の必要性である。移動派の画家たち自身が風景画と風俗画の関係をどう自覚的に捉えていたのか、伝統的な芸術アカデミー系の画家たちや観衆にとってはどうだったのかなど、この点は、今後より深く研究されるべき課題だと考えられる。

第二に、ロシアおよび国外の社会的背景と移動派の画家・作品の動向との関係について、より説得的な説明が必要である。たとえば 19 世紀半ばの中・下層階級の形成が「明るい風景画からの脱却」を、クリミア戦争敗北と農奴解放などの社会変革の機運が「ロシア特有の自然描写への関心の高まり」をもたらしたと述べられているが、その連関は明確ではない。また、ロシアに特有の美術アカデミーの構造などが明示されておらず、他国のアカデミーの美術教育との違いなどへの言及が充分とは言い難い。本論文は、絵画作品のディス

クリプションがきわめて丁寧で優れている一方で、論文全体のサイズが少量にとどまっている。一因として、こうした説明に充分な紙幅が割かれていないことが想定されるのであり、その意味でも今後、意識して取り組まれるべきである。

第三に、なぜ西洋的ピクチャレスクからロシアの起伏がなく暗い風景へと重点が移り、そこに「ロシア的精神性」まで付与されることになったのかについては、いっそうの考察が必要である。本論文では、「ロシア的なるもの」を伝統的なもの、都市に対する農村とする想定が見受けられる。だが、何もない「無」の空間こそ「無限」の可能性を有しているのではないかという、ロシア固有の美意識のパラダイムシフトに風景画が果たした役割については、未だ論じられるべきことが多く残されていると考えられる。

第四に、移動派の画家たちが「ロシア的な風景画」によってナショナル・アイデンティティを形成したという見解は、次第に多様になっていった移動派を充分に捉えきれず、ロシア帝国の植民地主義に回収されてしまう可能性がある。今後、ウクライナ出身画家たちの認識や反応などを、たとえばタラス・シェウチェンコを参照軸にして検討する必要があるだろう。

第五として、美術と文学の架橋により、ロシア文化研究を深化させる可能性である。本論文ではイヴァン・トゥルゲーネフの作品が引用されているが、各章で扱われた時代それぞれに、農村をテーマとした作品を残したアレクセイ・コリツォフ、ワレリー・ブリューソフ、アンドレイ・ベールイ、ニコライ・クリューエフ、アレクサンドル・ドブロリューボフといった詩人たちがいる。今後、農村や風景を主題にして、美術と文学の比較、その並行関係や差異を論じることで、美術という単一のジャンルをこえてロシア文化を考察できる可能性を秘めている。

公開審査において、井伊氏は、審査員・出席者から寄せられたコメント、質問に対して的確な応答をし、今後の見通しを述べることができた。

以上の過程を経て、審査員は提出された博士学位申請論文は学術的に高い価値を持つと評価し、全員一致で井伊裕子氏に博士（学術）の学位を授与するとの結論に達した。